



TITLE:

腎盂腫瘍を思わせた食道癌腎転移 の1例

AUTHOR(S):

長井, 辰哉; 高土, 宗久; 坂田, 孝雄; 佐橋, 正文; 下地,
敏雄; 三宅, 弘治

CITATION:

長井, 辰哉 ...[et al]. 腎盂腫瘍を思わせた食道癌腎転移の1例. 泌尿器科紀
要 1989, 35(9): 1565-1568

ISSUE DATE:

1989-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116670>

RIGHT:

腎盂腫瘍を思わせた食道癌腎転移の1例

名古屋大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 三宅弘治教授)

長井 辰哉, 高士 宗久, 坂田 孝雄

佐橋 正文, 下地 敏雄, 三宅 弘治

A CASE OF ESOPHAGEAL CANCER METASTATIC TO THE KIDNEY PRESENTING AS RENAL PELVIC CANCER

Tatsuya NAGAI, Munehisa TAKASHI, Takao SAKATA,
Masahumi SAHASHI, Toshio SIMOJI and Koji MIYAKE

From the Department of Urology, School of Medicine, Nagoya University

A 50-year-old man, who had undergone operation of esophageal carcinoma 2 years earlier, was admitted with the complaints of right flank pain and macroscopic hematuria. Intravenous urogram showed right unvisualized kidney. Right retrograde pyelography showed the dilatation of calices and irregularity of middle and lower calices. Computed tomography revealed severe hydronephrosis of the right kidney.

Right nephrectomy was performed under the diagnosis of either renal pelvic cancer or esophageal cancer metastatic to the kidney. Pathological examination revealed metastatic squamous cell carcinoma from esophagus. The patient was treated by radiotherapy, but died 4 months after the surgical treatment.

Literature on eight case of metastatic renal cancer from esophagus is reviewed.

(Acta Urol. Jpn. 35: 1565-1568, 1989)

Key words: Metastatic renal tumor, Esophageal cancer

緒 言

他臓器に発生した悪性腫瘍の腎転移は剖検例では稀ではないが、生存中に診断治療されることは、比較的稀である。われわれは、腎盂腫瘍を思わせるような臨床所見を呈した、食道癌の腎転移症例を経験したので報告する。

症 例

患者: 50歳, 男性

主訴: 右側腹部痛, 肉眼的血尿

既往歴: 1985年9月26日食道癌根治術

現病歴: 1986年9月肉眼的血尿あり, 11月に入り右側腹部痛も出現。症状がしだいに増強するため1986年11月10日当科受診した。1987年4月16日精査のため当院外科入院, 4月27日当科転科となった。

入院時現症: 身長 166 cm, 体重 45 kg, 右肋骨弓下に, 表面平滑, 弾性硬の腫瘤を4横指触知した。

検査成績: 末梢血; WBC 5000/mm³, RBC 289 × 10⁴/mm³, Hb 8.6 g/dl, Ht 26.8%, 血小板 26 × 10⁴/

mm³, 血清生化学; Na 140 mEq/l, K 5.5 mEq/l, Cl 109 mEq/l, BUN 19 mg/l, Cr 1.3 mg/l, UA 7.5 mg/dl, TP 7.0 g/dl, GOT 19 IU/l, GPT 12 IU/l, LDH 153 IU/l, ALP 128 IU/l, T-B 0.4 mg/dl, CEA 1.1 ng/ml, AFP 8 ng/ml,

尿所見; 潜血(―), 蛋白(―), 糖(―)

尿沈渣; 異常を認めない。尿細胞診; 疑陽性

X線検査成績: IVP および RP ; IVP では左腎については明らかな異常を認めないが右腎は描出されない。RP では腎杯の拡張, 中腎杯下腎杯の不整を認める。また腎盂から腎盂尿管移行部にかけては描出不良である (Fig. 1)。CT; 右腎に内部が不整な低吸収域を認める。腎実質は部分的に菲薄化するが一部に腫瘤状陰影を認める。入院時の CT では水腎が著明に進行している (Fig. 2)。腎超音波検査; 高度の水腎症を認め, 内部には, 一部に echogenic な腫瘤が見られる。体位変換によってもこの像は移動しない (Fig. 3)。

手術および臨床経過: 以上より右腎盂腫瘍もしくは食道癌腎転移による右水腎症と診断した。1987年5月

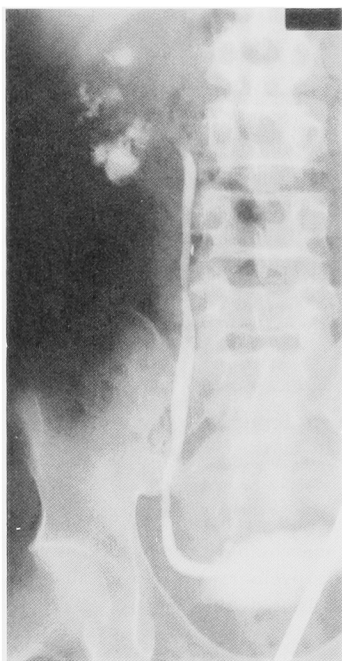


Fig. 1. Right retrograde pyelography showed the dilatation of calices and irregularity of middle and lower calices.

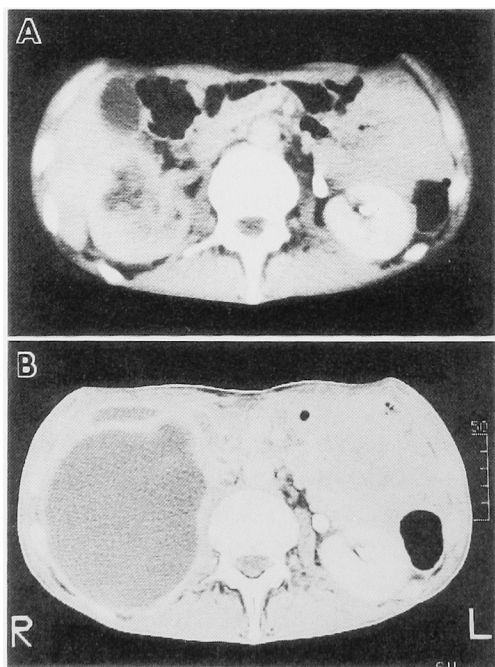


Fig. 2a. Computed tomography showed the irregular low density area in the right kidney.

b. At admission, the hydronephrosis was remarkably advanced.

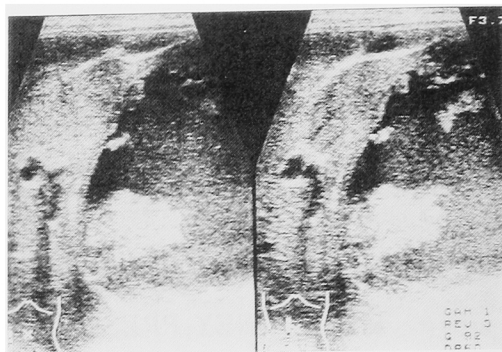


Fig. 3. The ultrasound revealed hydronephrosis and echogenic tumor in it.

11日右腎尿管全摘術および膀胱部分切除術の目的で手術を施行した。腰部斜切開にて右腎に到達すると、右腎は著明に腫大し、全周性に周囲組織との癒着がみられた。とくに右腎茎部は腫瘍の浸潤により一塊となって剝離困難であった。同部の術中迅速病理診断にて、扁平上皮癌との報告があり食道癌の腎茎部への転移と判断した。腎動静脈と周囲組織とを一塊として右腎を摘出した。術後、右腎茎部に残存する腫瘍に対して放射線治療を施行したが同年9月死亡した。

摘出標本：右腎は著明に腫大し、腎盂腎杯内に約500 mlの膿尿を貯留し腎実質は菲薄化していた。腎茎部は白色の硬い腫瘍によって一塊となり、腎盂尿管移行部では尿管は完全に閉塞していた。断面では腎盂腎杯内に内腔に向けて突出する数個の隆起性病変がみられた。

病理組織学的所見：腎実質内から腎茎部に広がり、また腎盂尿管移行部にて尿管を閉塞する、扁平上皮癌が認められた。腫瘍細胞は散石上構造を呈し、糸球体は減少し、尿細管もわずかに残存するのみである。また腎盂腎杯内の隆起性病変は壊死組織であった (Fig. 4)。以上の手術および病理所見から食道癌の腎転移で

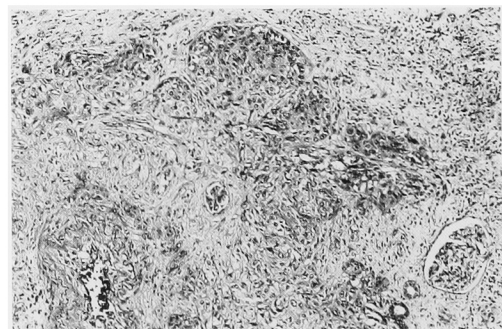


Fig. 4. The microscopic examination showed squamous cell carcinoma.

あると考えられた。

考 察

食道癌の腎転移は、剖検時にしばしば認められ、その頻度としては Anderson¹⁾ は13%, Bosch ら²⁾ は11%, Raven ら³⁾ は6%と報告しており決して稀なものではない。食道癌における臓器別の転移頻度でも腎は6番目、10番目などと報告されている。また転移性腎腫瘍の中で食道癌の占める割合としては4.8%とされ、肺癌、乳癌等に比べれば少ないとされているが稀であるといい難い⁴⁾。しかしながら、臨床例で症状を呈し、診断、治療されることは、画像診断の発達してきた今日でも比較的稀であり、著者の調べた限りでは、わが国の報告例は自験例を含め8例に過ぎない⁵⁻¹⁰⁾。臨床的に診断されることの少ない理由として、① Bosch ら²⁾が82例の食道癌の剖検例について、腎転移は9例(11%)に認められたが、単独の転移例は1例もなく、腎転移のある症例は全例4カ所以上の転移部位を有していたと報告したように、広範な全身性の転移の一環として起こることがほとんどであるため十分な検索がされることが少ないこと、② Bracken ら¹¹⁾が転移性腎腫瘍について3 cm 以上になるのは10%に過ぎないと報告しているように、臨床的に問題となる大きさにならないこと、③転移部位の多くの場合、腎実質であり腎盂腎杯に露出して血尿等の症状が出現するのが遅いこと、などが挙げられる。わが国の報告例8例について Table 1 に示す臨床像を見ると、年齢は35歳から65歳、平均53歳、性別では男性6例、

女性1例であった。転移側は左3例、右4例、両側1例と左右差はなかった。原発巣治療から転移巣発見までの期間は、5ヵ月から2年、平均12ヵ月であった。

転移性腎腫瘍において、最も問題となるのは、原発性腫瘍との鑑別である。しかし、わが国の報告例について見ると、症状としては、全身倦怠感、発熱、血尿などと、非特異的な症状ばかりであった。画像診断でも、DIP、IVP では圧排変形のための所見のものが多く、RP は自験例を含め2例に施行されているが共に陰影欠損を認め、CT ではほとんどの症例で不均一な low density mass、動脈造影でも1例を除き hypovascular と、特有の所見に乏しく、原発性腫瘍との鑑別の決め手になる方法はない。術前診断としても、転移性腎腫瘍との確定診断がついたと記載されている症例は林田ら⁷⁾ および岡本ら¹⁰⁾の症例のみであり、本症の診断が困難なことを示している。

われわれの症例の場合、他の症例と異なり腎盂腫瘍との鑑別が最も問題となった。悪性腫瘍の腎転移の経路としては、血行性、リンパ行性の2つが考えられるが、一般的には Zincke¹²⁾ や Grise ら¹³⁾が述べているように、心拍出量の1/4におよぶ腎への豊富な血行によって腫瘍細胞が腎へ運ばれ、これが、糸球体に腫瘍塞栓を起こし転移が起きると考えられている。このために腫瘍の転移部位は皮質または皮質から髄質にかけてがほとんどであり、転移性腎腫瘍のほとんどが腎実質の占拠性病変として発見されている。しかし林田ら⁷⁾の症例では、腫瘍は腎下極の占拠性病変であったが、これが腎盂尿管移行部に進展しここに狭窄をつく

Table 1. Review of the esophageal cancer metastatic to kidney in Japanese literature

No.	年齢	性	患側	症状	転移までの期間	尿細胞診	尿路造影	術前診断	治療	予後	報告者
1	53	M	左	不明	2年	不明	不明	不明	不明	不明	石川ら
2	56	M	右	右側腹部痛	1年	class I	造影されない	腎腫瘍または腎盂腫瘍腎実質内浸潤	腎摘	78日死亡	北田ら
3	35	M	両	肉眼的血尿	5ヵ月	class II	圧排変形	原発性または転移性腎腫瘍	腎摘+化療	8ヵ月死亡	杉山ら
4	65	F	左	肉眼的血尿	1年	不明	圧排変形	食道癌腎転移	腎動脈塞栓術+腎摘+化療	10週死亡	林田ら
5	61	M	左	左側腹部痛 発熱	10ヵ月	class I	圧排変形	腎腫瘍または食道癌腎転移	腎摘+化療	2ヵ月死亡	北見ら
6	49	M	右	全身倦怠感 発熱	6ヵ月	不明	圧排変形	不明	腎摘	6ヵ月生存	菊地ら
7	46	F	右	右側腹部痛	3ヵ月	class IV	圧排変形	転移性腎腫瘍	腎摘+化療	6ヵ月死亡	岡本ら
8	50	M	右	肉眼的血尿 右側腹部痛	13ヵ月	疑陽性	造影されない	腎盂腫瘍または食道癌転移	腎摘+放射線療法	4ヵ月死亡	自験例

っており今回のわれわれの症例に近いと考えられる。すなわちわれわれの症例では腎実質に転移した食道癌が比較的早期に腎盂尿管移行部をまきこみ腎盂粘膜に露出した後、腎盂内に播種して腎盂腫瘍を思わせる臨床像を呈したものと思われる。

治療法としては7例で腎摘、1例で腎部分切除と全例手術療法が施行されており、これに加えて化学療法が4例、放射線療法が1例に施行されている。また、Marsan¹³⁾は、食道癌の腎転移に対して腎動脈塞栓術を施行し良好な結果をえたと報告しているが、わが国の報告例では林田ら⁷⁾の報告1例のみである。これは原発性腫瘍との鑑別が困難であり診断のためにも手術療法を選択せざるをえなかったためと思われる。

予後については6カ月後も生存しているとの報告が1例ある以外は全例8カ月以内に死亡している。Zincke¹²⁾は転移性腫瘍であっても腎への単独転移の場合には外科的治療の対象となると述べているが、腎転移が単独でなく、全身転移の一環として起こることが多いことが予後不良となる理由と思われる。しかし、食道癌に対する集学的治療も進歩してきており腎転移巣に対しても、今後さらに積極的な治療が行われることが期待される。

結 語

腎盂腫瘍を思わせた食道癌腎転移の1例を報告するとともに、わが国の食道癌腎転移報告例8例について集計し、文献の考察を加えた。

文 献

- 1) Anderson LL and Load TE: Autopsy findings in squamous cell carcinoma of the esophagus. *Cancer* **50**: 1587-1590, 1982
- 2) Bosch A, Frias Z, Caldwell WL and Jaeschke WH: Autopsy findings in carcinoma of the esophagus. *Acta Radiol Oncol* **18**: 103-112, 1979
- 3) Raven RW: Carcinoma of the esophagus. A clinicopathological study. *Br J Surg* **36**: 70, 1948
- 4) Grise P, Botto H and Camey M: Esophageal cancer metastatic to kidney: report of 2 cases. *J Urol* **137**: 274-276, 1987
- 5) 北田真一郎, 新川 徹, 長田幸夫, 石沢靖之: 腎転移をきたした食道癌の1例. *西日泌尿* **42**: 845-848, 1980
- 6) 杉山高秀, 辻橋宏典, 松浦 健, 金子茂男, 郡健二郎, 秋山隆弘, 栗田 孝: 転移性腎腫瘍. *泌尿紀要* **29**: 1499-1505, 1983
- 7) 林田英資, 小西 平, 朴 勺, 友吉唯夫: 食道癌の腎転移症例. *泌尿紀要* **33**: 69-73, 1987
- 8) 北見一夫, 増田光伸, 千葉喜美男, 熊谷治己: 食道癌を原発とする転移性腎腫瘍の1例. *泌尿紀要* **33**: 1221-1225, 1987
- 9) 菊地悦啓, 渡辺博幸, 石井延久, 沼沢和夫, 今村全: 腎転移を来した食道癌. *臨泌* **41**: 1069-1071, 1987
- 10) 岡本英一, 荻野敏弘, 寺川知良, 島 博基, 森義則, 生駒文彦, 植松邦夫: 転移性腎腫瘍(食道原発)の1例. *泌尿紀要* **34**: 1017-1021, 1988
- 11) Bracken B, Chica G, Johnson D and Luna M: Secondary renal neoplasms: an autopsy study. *South Med J* **72**: 806, 1979
- 12) Zincke H and Furlow WL: Metastatic squamous cell epithelioma of the kidney; report of a case of bilateral involvement and review of the literature. *J Urol* **109**: 971-973, 1973
- 13) Marsan RE, Baker DA and Morin ME: Esophageal carcinoma presenting as a primary renal tumor. *J Urol* **121**: 90-91, 1979

(1988年11月27日受付)